

津田昇平教話 第二十八話

令和三年一月二十八日 朝の教話

金光大神ができたからこそ氏子が助かることになり。

おはようございます。令和三年一月二十八日をお迎えいたしました。

昨日は、佐藤光治郎先生みつじろうのお伝えで、教祖様がね、仰った、

「神には口がない、氏子には口耳があるから、口耳のある者に言っつて聞かせよと、神様が仰せられる」

【理Ⅱ 佐藤光治郎 八】

という、神様と人間との橋渡しですね。間に立つ人がいないと、神様の思いというのが氏子には伝わらない。そこで、氏子が神様をたとえ思っても、身勝手な信心になってしまう。日柄方角ひがひうがくばかり見てね、知らず知

らずに神様の留守を狙うような、空き巣みたいな泥棒みたいなことになってしまふ。そういうご無礼がないように、本当の信心、真の信心、本当の神様の道というものを、伝えてあげてもらいたいけれども、それは人の力を借りないといけない。と言うと、ちょっと偉そうですけれども、喋れんといかんし、聴けないといけない。だからこそ、金光大神様を差し向けられた。氏子の思いを神様に取次ぎ、それに対する神様の思いを氏子に取次いでいく。その取次の業というものは、生きている人間、肉体がないとできないってことになりますね。

口と耳があるというのんは、亡くなった御霊様も失っておられますので、生きている人間じゃないとできません。だからまあ、生きている人

間に、いつの時代でも、神様は、てんちかねのかみ天地金乃神を助けてくれという願いを持って、しっかりと御用ごように立ってくれという願いを御道おみちの教師、ひろまえ広前の守もりにかけて下さっているという、そういうお話をさせて頂きました。

教祖様は神様から、たくさんさいてんご裁伝、お知らせを頂いておられましたけれども、その中で信心を進められて、神様からのご信頼もこう厚くなっていかれましてね、その中で、神様とこんこうだいじん金光大神様と氏子の関係というのを、神様が直々にこうお教え下さるということが、神様と教祖様だけの時もあれば、参ってくる氏子とのやりとりの中で、神様が仰せられることがありました。

金光教は取次おしりの道ですから、他の宗教とは違う。何が違っているから、やっぱり取次なんですよ。取次があつてこそ金光教であり、金光教といえは取次になってきます。その取次があるから人が助かつて、御道が出来上がったわけですけども、まあそこについて神様が仰つておられたところを、少しおさらいをしていきましょう。

明治十四年の九月の三日ですけども、神様からお知らせを頂かれましたよね。教祖様はね。

一つ、天地金乃神同様と申し、生神金光大神。

【覚帳二十五―二十九― 二十七より抜粋】

ていう言葉から始まります。同様に「天地金乃神同様と申し、
てんちかねのかみ
いきがみこんこうだいじん
生神金光大神」つまり生神金光大神、教祖様ですね。「生神金光大神、お
まえは天地金乃神同様である。「同様である」ということはどういうことか
って言うたら、まあ、例えの文章で言うたら、二人の女性が仮にいたと
したら、まあ、二人はいとこであったとしましょう。で、二人の女性が
たとして、その血縁で言えば正しくはいとこではあるけれども、幼い頃
から同じ屋根の下ですっと長く育ってきたから姉妹同様だ、というふう
な表現があったとしましょう。これ姉妹同様だ、というのはまあ、実質
的には、血縁の関係ではないとこですから、兄弟ではない、姉妹ではない。
けれども、同じ屋根の下で、幼い時からずっと一緒に育ってきたからも

う姉妹同様だ。ま、姉妹とおんなじだ、同じようなもんだ、ということ
言いたいわけですね。まあ、「盗人同様だ」であるとか何とか同様だ、○
○同様だ、というのと何々と同じということだということの意味します
けれども、「天地金乃神と同様」と申し、生神金光大神」。うん。まあ文法
的に考えたら「生神金光大神、おまえは」で先にきていいんですが、わざ
わざ一番最後に金光大神と入れるっていうのは、まあより強調したい時
にこういう文章の使い方をします。つまり、天地金乃神様と同じような
もんなんだ、生神金光大神お前は。ということですね。まあそれぐらい、
大きいことを仰っておられる。

そうすると、教祖様は、「恐れ入ります。と申し上げ、」まあ、恐れ入

りまする、まあそうでしょうね。恐れ入るというじやうですから、ありがたくて恐縮するということでしょう。「恐れ入りまする、と申し上げ、すると今度は神様がそれに対して、お答えになります。「恐れ入ることなし。金光大神ができたからこそ氏子が助かることになり。」とこう仰るんです。恐れ入ることはない。まあありがたくて恐縮する教祖様に対して、いやいや、もう恐れ入ることはないぞ、と。金光大神お前がいるから、できたからこそ、いるからというより、できたからこそ、と仰ってますもんね。実際そうなんでしょうね。金光大神が、最初からあったものを差し向けたわけじゃなくて、金光大神ができたからこそ、出来た、ということとは本当やと思います。

ここ、私の中では大事でね。教祖様はただの、しがない、めぐりの深いただの、至らん弱いどうしようもない人間やとしか思っていないません。ただ、生神金光大神になったただけであってね、金光大神になったんです。まあ別にそれは、教祖様だけじゃなくて、誰でも信心したら、なれるはずなんです。ほんとはね。だって人間は神様の子ですから、信心したら神になって当たり前なんですよね。カエルの子はカエルですよ。おたまじやくしがいきなり、とんびになることはありません。大きくなったら、成長を正しくしたんであれば、カエルになるもんですから。人間は神様の子ですから、お育て頂いて、成長したら、神になるというのは、当然のこと。

でも、それがそう簡単なことではないですけども、教祖様は、めぐりが深くてどうしようも助かりのないようなところであっただけでも、だからこそ、信心に目覚めて必死にお縊すがりをさしてもらって、神様に教えて頂いて、そして、神様にたたき上げて頂いて、金光大神ができたというのは、本当にその通りやと思います。で、そうなったからこそ、氏子が助かることになったと。赤沢文治、お前が一生懸命信心して、金光大神という御神号ごしんごうを頂くところまで、御霊みたまの位ゐを上げたなど、自分の本心の玉たまを磨みがいて、金光大神までなったなど。それができたからこそ、氏子が助かることになったんや、ということを仰ってます。だからまあ、教祖様っていったら、まあ教祖様ってというのは赤沢文治さんに言ったんで

しょう。

そして、それをまあ続いて神様仰るわけです。金光大神がきたらこそ、氏子が助かることができるんだという、その後、続いて、

日月天地金乃神は、氏子の目がつぶれても病気でも、え
い(よう)治^{なお}さん。

【覚帳二十五―二十九― 二十七より抜粋】

「えい治さん」というのは、カッ」で「よう治さん」、まあ、とても治せないうってじよどぬ。

日月、日、月ですね。日月というのは、日と月。お日様とお月様ですね。
日月天地金乃神は、氏子の目がつぶれても「ここは分かりますね。で、
病気でも、分かります。「えい治さん」。「よう治さん」と仰ってる。
日月というのは、日天四、月天四、と言いましてね、ま、天地宇宙を表
す一つの象徴ですね。明るいとくろも暗いとくろも、一目に見通し、守
って下さっておる。ま、その一つの象徴と言ってもいいと思います。で、
この天地一切を司るこの天地金乃神様は、自分が生み出したであろう
氏子の目がつぶれても、病気でも、よう治さん、治すことができないう
てことを仰ってるんですね。

で、続いてまた仰います。「金光大神は、氏子の家内」、家の中です。氏

子の家の中、「鳥畜類とろくちゅうまでの」「鳥畜類とろくちゅうっていうのは、鳥や獣けもののことです
ね。まあ、家畜というふうな言葉がありますけれども、まあ鶏であると
かね、当時ですから、飼ってたりとか、いうことはもちろんあったでし
よう。また、牛やら馬やら、そういった諸々の獣けものですね。鳥畜類。鳥や獣
までの、その目でも、人間だけじゃないと、氏子の目だけじゃない、もう
鳥畜類までの、目、諸病しよびょう、諸病しよびょうですからいろんな病気、身上しんじやうのこと、な
んでも諸事しよじのこと、もう諸々しよしよですよ。なんでも諸事しよじのこと、叶かなえてやる、
叶かなえてやり。

「金光大神は、氏子の家内、鳥畜類までの目、諸病、

身上みのうえのこと、なんでも諸事のこと叶えてやり。」

【覚帳二十五―二十九― 二十七より抜粋】

と仰る。これ神様が、金光大神こんこうだいじん様に仰ってるんですね。でもまあ、そっだ
と思うんです。でも面白いですよ。日月天地金乃神じつげつてんちかねのかみは、氏子の目がつぶ
れても、病気でも、よう治さん。でも、金光大神お前は氏子の家の中うちのこ
と、で、鳥畜類、人間はもちろんのこと、鳥畜類までの、目でも、諸病で
も、と仰る。その前は、氏子の目がつぶれても病気でも、よう治さん、っ
て神様仰ってるんでしょ。それに対して、金光大神お前は、氏子の目や
ら病気はもとより、鳥畜類こゝろけいぶの目やら諸病しよびょうやら身上みのうえのこと、なんでも諸事

のことかなえてやれるって仰る。ていついつにしているんですよね。ま、これが明治十四年の九月の三日ということですよ。

これ、分かりますかね。あの、当たり前のことなんです。これがまあ、金光教の大事なところではあります。天地金乃神様にはよう治さんでも、金光大神、お前は、神にはよう治さんものがあったても、氏子の目やら病気やら、もとより鳥畜類に至るまでの目、諸病、身の上、家の中、なんでも、諸事のこと、叶えてやれるよ。こない仰ってるんです。

これどういことですかね。金光大神ができたからこそ、氏子が助かるよ、いつまでこう仰るから、天地金乃神同様なんだと、もう姉妹同様、親子同様と同じように、もう天地金乃神同様、と、金光大神様に仰る。生

神金光大神ですね。もうこん時。で「恐れ入ります」と言ったら「いやいや恐れ入ることはない」と、「金光大神お前ができたからこそ」、できたからこそ、つまり信心して金光大神になったからこそ、氏子が助かることになってるということ。これ、まあここだけ額面がくめん通り取ったら、天地金乃神様は助けられんけど、お前は助けられるって仰ってるんです。これ、考えたらなかなかすごいことを仰ってますよね。でも、そうなんですよ。これ、本当のことなんで、ここをよう分かってないと、おかしなことになります。

じゃあ、もう一つ、違つみ教えもちょっと紹介しましょうか。これは、

島村八太郎さんの伝えですけれど、

いろいろの神や仏に頼みて、おかげがあると言うけれども、おかげのできるもとは、天地金乃大神のほかにないぞ。

【理Ⅰ 島村八太郎 二】

おかげのできるもとは、てんちかねのおおがみ天地金乃大神のほかにないぞ。これは、教祖様がご理解なさってるんですね。

さて、これを皆さん、ごない思いますかやね。んー、矛盾していると感じ

じるか、つまり、神様は金光大神様こんこうだいじんがないと助けられないし、金光大神
が、あるから助けられる。天地金乃神様てんちかねのかみは、氏子の目がつぶれても病気で
もよう治さんと、でも、おまえは、人間はもとより、氏子の家の中やら、
鳥畜類ちゆうしゆるいの目や病気やら、身の上のこと、なんでも諸事のこと、おまえは
叶えてやるこじがでるやろ。神にはよう治さん、ようできん。とこ
が教祖様はっていうと、いろんな神仏やらおが拜むやら言うて、おかげ頂く
言うけれど、おかげのできるもっていうのは、天地金乃神様のほかに
はない。つまり、おかげというものは、おかげのできるもつですね。天地
金乃神のほかにない、と仰る。

これまあ、ちょっとまあ一言で言いましたらね、何を言っているかと

言ったらこれ、天地金乃神様は、おかげというのは、天地金乃神様しか
実際にはないんですけれども、でも、神様だけで、おかげを授けること
ができなかったわけですよ、だから、氏子は苦しんでるわけです。神
様が一方的になんでもおかげを授けることができるであれば、こんな楽
なことはないんですよ、それができんから、苦しいわけですよ。だか
ら氏子が助からんし、氏子が助からんから神も助からんという状況にな
ってきた。

で、じゃあ、氏子が助かるためには、とないなったらいいんですか。神
様がおかげは持ってらっしゃる。じゃあ授けようと思う。でも氏子が器
がないわけですよ。ここが問題になってくる。じゃあ、金光大神様って

いづのは、話をすることが出来る、聴くことができる。昨日のみ教えです
ね、口耳があるという者。口耳がある者、つまり、金光大神様ですね。
生きてるといふことが大事であつて、それを、生きている、口、耳ある
者、氏子、参つてくる氏子に対して、話して聞かすことができるし、氏子
の話を取次いであげることが出来る、神様に。そして初めて、氏子は、
無鉄砲にむたらやたらに、何でもかんでも道からずれてるのに、信心し
とつたらそれでええんやろ、ていつ訳の分からんやり方ですわね。身勝
手な信心、拝み信心、自分の性根なんてちつとも関係ない、手え合わせ
ときゃいいんやろ、拜んでくれたらいいんやろ、お金渡すから拜んどい
て、そういう助かりたいという気持ちはあるても、遠方からよく一生懸

命、時間かけて手間暇てまひまかけて参っても、でも自分の心というものを、本当に改まっていくところを学ばんといかんわけです。でもそれ、神様と氏子だけじゃ無理じゃないですか。だって、口がないですもん、神様にはね。でも、金光大神様には、口があるし、耳があるわけです。氏子のお話を聴ける耳もあれば、氏子に語る口もある。ここが大事なんですね。だから、金光教って大事、金光大神様って大事なんです。それがないと、橋がないのと同じで、向こうの岸に届かないんですよ。氏子も神様のところに行けない、神様も氏子のところに持って行くことができない、橋がないから渡れないんですよ。じゃあ、橋があるから、渡ることができると、橋があるから、おかげを授けることができる、ってなりますね。

で、これはね、神様は、氏子の目がつぶれても、病気でも、よう治らん
というのんは、もうちょっと詳しく言ったら、神様は、氏子の目がつぶ
れても病気でも、おかげを授けようと思ってそのおかげを作ることはい
てやれるけれども、おかげを授けようにも、氏子がおかげを受け取る器
がないから、授けようにも授けようがない。ところが金光大神、おまえ
は口も耳もある。生きてる人間で肉体がある、だから、その参ってくる
氏子と喋えはしれるやろ、聴きけるやろ。氏子にとったら、拝む目当てにもなる
やろ、的まじにもなれるやろ、それが大事なんやと。だからな、金光大神、神
が話をする天地の道理のことを氏子に話して聞かしてやってくれ。それ
を氏子が合点がてんがたって、そして、それを心にかけて、わが身、わが一家を

練習帳にして、信心の稽古けいこに励はげんだのであれば、器おのが自おのずからできる。できるから、ずっと持ってた、持て余してた、氏子が喜ぶやろう、助かるであろうおかげというものを、授けることができる。だから、氏子も助かることができる。これで、ようやく氏子も助かり、神も助かるということになってくる。金光大神、ありがとうございます。っていうことなんです。分かります？で、金光大神は、氏子の家内、家の中、氏子のまあ、家の中であろうと、鳥畜類の目であろうと、病気であろうと、つまりもう人間だけでない、もっと諸々のこと、氏子が日々の暮らしの中で願うこと何でもってことです。つまりね。どどつども家内安全でありますように、とかね、あの、うちの牛が病気になったんで、もうこれ以上、農業立ち行きません

ので、とか。鶏が病気になって死んでしまうのでどうということでしょうか、助けて下さい、でもね。犬の目がもうつぶれて見えないうようなんで、助けてやって下さいでも。どんな病でも、人間だけじゃない、鳥畜類の目でも諸病でも、身の上のこと、何でも、諸事のこと、叶えてやれる。これ、同じように解釈かいしゃくしたらすべに分かりますよ。これおかげは、誰が出してるかって言ったら、天地金乃神様がおかげを作ってるんです。金光大神様がおかげを作るといふ言葉はただの一言も教典には出てこないです。それは、神様が作ることですから。究極きゅうごく的に言ったら、授けるんだって神様しか授けようがないんですよ。でも、神様だけでは、どうしようもないんですよ。神様と氏子だけでは、どうしようもないです。だから

ら、天地の道がつぶれてると仰って、道がつぶれてるんで橋がつぶれてるんですよ。通り道がないんですよ。そこを、教祖様が願いをかけられて、金光大神にまでなられて、そして、道を整えて下さった。橋を作って下さった。そうすると、氏子が願うことは、神様は叶えてやりたい。おかげ授けてやりたい。「何のことや?」「家の家内のこと」「分かった分かった」「畜類のことまで」「ああ分かった分かった」「目が見えへん」「分かった」「諸病」「分かった」何でも「ああ分かった。何でもおかげ授けてやる。だって神は人間であるお前かわいいからな。お前はかわいいな、おかげ授けてやりたいからなあ。何でも授けてやるで。持ってるからな。」

「で、器は?器は持ってるか?器はないんか!そんじゃあ、おかげを授

けようがないんやないか。器作らんといかんで。聞こえてるか、わしの声？」「氏子はちっとも聞こえはしません。願ひ捨てますよ。」氏子、おい、聞いてくれるか、分かってくれるか。はよ作ってくれ、作ってくれんと、おまえ苦しいの見てるのは、親としてつらいわ。頼むからしっかり信心してくれ」

氏子は全然聞こえません。信心してると思っています。あっちに拝み、こっちに拝み、あっちに行つて、こっちに行つて。日柄ひがら見て、方角見て、一生懸命やつてるつもりです。

神様は、「いやそんなん違つ、そんなん違つ、そんなんやってもおかげにならん」

氏子は助からん。神様もそれ見て助からん、苦しい、つらい。

「金光大神助けてくれ」

「はい、金光大神、出て参りました。耳あります、口あります、肉体があります」「これ大事。」

「氏子の話、はい聞きましょう。神様に取り次ぎます」

はい神様「こつしいや、ああしいや」と仰る。はい、と聞いてて、その通りにして、合点がたって、その通りにして、ま、合点がこつがいくまいが、最終的にはそうするしかないはずなんですけど、まあ、その通りにして、おかげの器ができる。できたら、神様としても「やっと作ったか、やっと信心できたか、じゃあ、おかげを授けてやろう。なんやったか

な、あ、そうそう、氏子の家内のことな、家の中な、鳥畜類の目？うん、
いいよ。諸病、ああ分かった、うん。で、諸々のことな、うん何でもええ
わ。何でもお願いしたらええ。あの、お前自分だけやったら、身勝手な信
心なるやろ。だから何でもええからな、金光大神の手続き持っていきや
言うて。でないと、お前身勝手になるやろ。おかげ授けてあげたいと思
って神は持つとるけどやな、お前持ってへんやないか。おかげ授けよう
がないやろ。それ困んねん。お前も苦しいんやけど、わしも苦しいんや。
だから、何でも金光大神の手続き持ってやりや。そしたら、あんたも分
かるし、神様もな、神もおかげ授けようがあるからな、頼むで。しっかり
しいや。ていうことやから、金光大神頼むわ」

っていうことが立教神伝りきょうしんでん。まあこんな関西弁じゃないでしよっけど。

だからまあ、これが金光大神様と氏子の関係になってきますね。おかげを作るというのは教祖様にはできないんですよ。せやけども、神様の御言葉ごことばで、御裁伝ごさいでんでよく、神様から金光大神に対して、氏子、金光大神がいるから、まあ、おかげを授けられるとか、助けてあげられるとか、という言葉はやっぱり出てくるんですよ。願う氏子におかげを授け、理解申して聞かせ、これ、おかげを授けていうふうにして仰ってる、でもおかげを作りというふうな表現はないんですよ。おかげのもとではないんです。

でも、おかげはまあ言ったたら、橋で言ったたら、右側の岸にあるんです。これ、誰が作ったんですか、これ神様が作ってるんです。で、氏子はって言ったたら、まあ、もう大きな川が流れててね、その左側の方に、岸おると。器は？って器は持ってないんです。「神様助けて」と、どっかで言うてるんです。さまよいながら。で神様は、助けてあげたい。おかげを用意してる。これ助けようがないでしょう。おかげは作ってあるんですよ。氏子の願いがあればね。でもそれを渡しようがないから、橋になる存在が、金光大神様。で、それで、おかげを渡してあげてる。だから、願う氏子におかげ授けてと言っても、まあ神様が授けて下さるってというのが実際っちゃあそうなんですけれども、でも、違つ視点から見たら、金光大

神様がいるからこそ、神様もおかげを授けようがあるもんですから、だから、願う氏子におかげを授けということもこれもやっぱ本当なんですよね。

まあそれだけ、神様にとつたら、金光大神様を頼りにしてらっしゃる、依存してらっしゃるんですよ。金光大神がいるから世に出てくることができた。実際にはいらっしゃったんですけれども、まあ氏子におかげを授けられる、神様が目に見える形で、立ち現れるお徳がね、神様のお徳。信心してなくてもですよ、天地はまあ、おかげに満ち満ちています。そやけども、そういうこととはちょっと別に、氏子が、ま、願うおかげですわね。立ち行かんから立ち行かして下さいというその具体的な、身の上

の一人一人に対して、信心するからこそ、授けられるおかげって言うてもいいでしょう。それは、信心しなくても頂けるおかげとはちよっと違う。それは、氏子が器を作らんと、おかげを授けようがない。それは、氏子がしっかりと信心してくれんと困る。でないと、神様も助からん、氏子も助からん。だから金光大神様が、できた。できたんです。できて、それを差し向けて下さってるんですよ。

まずは、教祖様を育てるところ、たたき上げるところからね、進められて、育てて、それを送り込んでるわけです。そして、てんちかねのかみ天地金乃神様の大きな大願たいがん、まあ野望なんてまで言ったらえらい変な話ですけど、大願と

して、やっぱり教祖様一人じゃない、金光大神こうこうだいじんを各地に生み出していく、
ジエネレーターみたいなもんですよね。そして、万国ばんこくまで残りなく金光
大神でき、という願いがかけられる。教祖様を発端ほつたんとしてね。ジエネ
レーターというのは、生み出していく、生成していく、シャボン玉をくるく
るくるくる回したらシャボン玉が出てくるような機械があったと考えた
ら、分かるでしょう。金光大神ジエネレーターなんですよ。金光大神様
を生み出していくのが、本来教祖様。それがまあ、生神いきがみ金光大神様特別とくべつで
すよね。で、それでまあ、全国各地、世界にもお広前ひろまへができ、尼崎教会も
その中の一つの出社しゅしゃとして、金光大神様の広前が尼崎教会に出来上がっ
て、今年で百二十四年目を迎えることになっております。ま、これが、神

様と金光大神様と氏子の関係になりますね。そのことも少し、よく理解しておいた方がいかなあと思います。

「神からも氏子からも、両方の恩人はこの方金光大神である。」ってね、あります。あれは金光大神こんこうだいじんさんぎょうし賛仰詞さんぎょうしの一説に出てきますけれども、まあ、これについてはまた、明日か明後日かそのあたりでちょっと、気が向いたら話しようと思います。

これもまあ、神様が、仰った言葉なんですよね。神からも氏子からも両方の恩人は、この方金光大神である。何でかって言ったら、もう同じ話になりますけど、今言ったことなんです。ま、今言ったようなこと

でもこれが、金光教の根本であり、これ教祖様だけじゃなくて、肉体がある、口耳があるということが大事なんです。それがなかったら出来ませんのでね、氏子にとつたらもう神様も、教祖様も、亡くなった人でも、声やら聴こえんし、目も見えんし、まこ的があるようでないようでやし、これ、変わらんですよ。生きてるとということが大事で、生きてる人間しか取次とりつぎができないんです。取次の神として、取次を見守って働いてね、守る、それはまあ、教祖様は御霊の神様としてもできます、でも肉体はもうないですから。だから、そういう意味じゃ取次はできないんですよ。肉体がないですもん。聴いて喋ることができない。これ、お知らせ頂けて教祖様とベラベラ喋れる人やったらできるかもしれませんけどね。そ

れができるのやったら、神様ともできますし、もう大丈夫でしょう。だから、生きてるといことが大事なんです。だから、万国ばんこくまで残りなく金光大神でき、というのは、やっぱり大事だね。でも、尼崎教会の金光大神様として、和太かずた先生がいらっしやった時はそれでいい。でも亡くなったらどないなるんですか、潰つぶれますよ。じゃあ、二代先生が引き継いだ、じゃあ二代先生が亡くなったら、たまの先生が。じゃあ、たまの先生がいる間はええですよ。生きてる、口耳もありますからね、でも亡くなったら口耳なくなりますよ。そしたら老先生が。じゃあその後っていったら、私が。ってやっぱりなるわけです。

こうして、生きてる人間、姿形すがたかたちがあるということがあって初めて取

次がなされるんです。それがあから、神様のおかげを、私たち氏は、授けて頂くことができるんです。ここをよう分かってないと、神様だけ拝んどってもなかなかおかげにならない。金光大神様の立場から見たらですよ、いや、私を拝んでもおかげにならない、神様がおかげ持つてる、これ本当ですよ。だからね、神様の言うことと金光大神様の言うことは、ちよつと立場が違つんで、仰るゝことが違つんです。でもこれ、本当はどっちも本当なんで、片一方だけバカみたいに信じてるようじゃ、これ信心に本当はなんのんです。神様の言うこともそうやし、金光大神様が仰ることもそうなんです。だから、どっちかだけやったらね、てんちかきつけ天地書附に「生神金光大神 天地金乃神 一心に願え」、なんて出てこないですよ。

そうでしょ？天地金乃神様だけでいいんやったらね、生神金光大神消しときゃいいですよ。その変わり誰も助かりませんよ。だって橋がないんですもん。教祖様が生まれる、まあ、金光大神様がね、出てくる、できあがってくる、その前の状態ですよ。神も、神様も氏子も助からん状態ですよ。生神金光大神というのはその取次なんですよ。でこれ、何回もまあ当たり前ですけど、これ教祖様だって肉体がありましたよ。耳も口もありましたよ、あの方。でも亡くなったから今ないでしょ。じゃあもうこれ御霊みたま様なんです、簡単に言ったら。金光大神という御霊みたまの位ゐを持っていますから、生きてる間から。だから、肉体をお返ししても、生神金光大神という御神号ごごうはずっと残って、それは御霊の位ですからね。御霊の働

きにおかげがあるんですから当然のことです。でも何回も言います。肉体がないと無理なんです、取次というのは。で、教祖様は生神金光大神様は取次を見守って下さる、その神様として、お働き下さっている。そういう意味じゃ私のバックグラウンドにいて下さる和太先生、慎治先生、たまの先生も同じようにですけど、その大元おおもとのところ、取次の神とも立たれる永世えいせい生き通し、まあ御霊ですから皆生き通しなんですけど、永世生き通しの、生神金光大神様という取次の神として、お働きは下さってる。和太先生も御霊ごれいじん神様として、永世生き通しでお働き下さってる。慎治先生もたまの先生も、永世生き通しの、尼崎教会の金光大神広前の守もりとして、御霊様として。でも、徳の大きさは違いますわね。

もういよいよの根本のところでは、生神金光大神様ですから、そこからスタートして、そこからジエネレーターですから、教祖様は。時代を超えてのね。そして、私もこの世界に、この広前の守として、生まれてきた。これ、誰が生み出してるかと言ったら、神様が教祖様を通じて、生神金光大神様を通じて、ジエネレーターしてる。つまり発生させてることで、私が生まれて、時代を超えてね、で、こういふことになってきます。だから、「生神金光大神 天地金乃神 一心に願え」。

生神金光大神様、ああ教祖様拝んどいたらいい、違いますよこれ。大間違いせんように。生神金光大神様はもうもちろんのことなんですけども、金光大神様があって、教祖生神金光大神様があって、それぞれの各地の

広前に自分にとっての金光大神取次者が、今もあるわけですから。そのお取次を頂きながら、天地金乃神様と自分とを繋がっていきなさいよってことを仰ってるんです。

まあ、この仕組みをよく理解しておくことは、信心する上で大事ななあと思います。でないと、まあまた身勝手な信心、いくら金光教、教祖様の教えて言いながらも、まあ身勝手になりますよ。そうなるしかないですもんね。うん。だって我流がらうですもんね。だからやっぱり自分自身の身の上のことをお結界でお届けして、それに対する神様の思し召めいしを、教えて頂く。それが、取次の業わざですから。

私はありがたいことに、自分自身が神様にね、まあどういっ思し召めいし

か、どつにもどつちもどつちもいかんところを直ただ々に教え助けて頂いて、光の体験をして、そこから教えて頂いたことを参ってくる氏子に基本的に全部話をしてますんで、教典読んだから教えてもらったっていう感覚はまあ全然ないです。教祖様も同じように教えられたんやなあ、ああ私と一緒にやなあ、とべらいに、偉そうですけど、そんなふうに思ってますまできてますし、それで間違っではないです。私が申し上げることと教祖様と違つところがあつたら教えてもらいたいですけれども、ただの一度もないと思います。ま、でも私は私で、神様から色々修行させて頂いて、そんなでしか、本当の意味では、自分の身につきません。身についたものだけは、氏子に伝えることができます。許されます。でない、頭で

覚えたことを話してもね、結局、おかげになりませんわね。うん。他人のふんどしみたいなもんですから。今こうして私が話してるのは、神様が教祖様に御裁伝ごさいでんを下げたことを話してるんです。でもこれ、私と同じやと思ってるんです。だから、私の話よく分かりますと思います。リアルで感じると思います。だって私自身がそうだから自分のこと話してると思ってますから。

ま、とはいえ、教祖様はすごいですよ。でも教祖様はすごいって言うても、教祖様のお広前に参ってみんなおかげを頂いたかったらそんなわけじゃないんです。うん。千人参って本当に繋がったのは何人言ったかな、三人とか四人とかって何か聞いたことありますよ。あとの九百九十

六人、七人ぐらいは、参ってきてもまあ、結局は繋がらんかったんでしようね。でもその一部、ほんの一部の人でも繋がった人が、御道を広げて、ここまで広がってるっていうのは、すごいことですね。だからどんなに、氏子の心であってもね、火打ち金^{かね}、火打ち石、火口^{ほくち}ってね、言いましたでしょ。まあ、どんなにいい火打ち金はまあ神様として、火打ち石である教祖様があったとしてもね、でもやっぱりそれだけでもいかなのでしょうね。氏子の心が湿ってたらいかなのでしょう。

まあ、そういうわけですから、しっかりとそれぞれの神様と金光大神^{こんこうだいじん}様と氏子という、その関係をよく理解した上で、神様にお継り^{すが}し、金光

大神様にお継りして、信心させて頂きたいなあと思います。今日はここまでにしましょう。

どうぞ今日も一日、信心のお稽古けいこ、わが身わが一家を練習帳にして、お稽古はきに励んで、神様から頂くおかげの器を作ってってください。稽古したらした分だけ、必ず器は出来ますからね。それ次第でおかげは入るか、どうかが決まってきました。「まだか、まだか」というふうにして言う前に、しっかりと自分が器を作ることだけ考えたらいいですね。

はい、どうぞ、おかげ頂いてください。ようお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第二十八話

令和三年一月二十八日 朝の教話

令和六年五月二十日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
